

データ アラカルト

Q：植物教材を扱う教師のかかわりは？

A：花や野菜と子どもの心が通い合うしかけ
名前を付けよう。手紙を書こう。

栽培活動は、長期にわたっての活動です。しかも、野菜によっては、成長の変化もあまり見られないものもあります。だから多くの先生は、野菜に名前を付けさせたり、畑にクラス看板を立てたりしています。とても良い活動です。

（但し、今までの実践がそのような類が多いので、真似でもしてみようかという構えでは、あまり意味をなしませんので要注意）

名前を付けて活動させると、子どもたちと野菜の間に会話が生まれます。その様子は、子どもたちの観察カードなどによく表れています。

例えば、小さなキュウリの苗を植えた頃は「キューちゃん早く大きくなってね」「いっぱい水をあげるからね」と、一方的に子ども側から言葉かけの表現が多いのですが、やがて気温が上がる7月頃になると、大きく成長して垂れ下がる葉を見て、「キューちゃん、どうしたの？元気がないね。今日は暑いから水をたくさん飲ませてあげるね」とか、病気にかかり始めた葉を見つけて「キューちゃん、葉っぱが少し白くなっているよ。大丈夫かい、畑の先生（農家のおじさん）を呼んでくるからね。待っていてね。」とか、自分が育てている作物に寄り添いながら一生懸命お世話している様子が、キュウリと自分との双方向的な表現となってくることが多くなります。そして、収穫出来る頃になると、「キューちゃん、とうとうがんばったね。ぼくも、がんばれたよ。ありがとう。」「君は第一号だよ、だからキューリ王だよ。ぼくは、みんなからおめでとうって言われたよ。うれしかったよ。だから、キューちゃんにありがとうって言いたいです」

こうしてみると、自分の育てる野菜などに名前をつけて行う活動は、子どもの思いや願いを一層ふくらませ、意欲的な活動へと導いていきます。しかも、知的な気付きがたくさん生まれることにも繋がって行きます。また、友達との交流も活発になります。野菜に名前を付けることは、野菜は自分の分身となり、大事な友達となっていき、生き物を大切にしようとする学習へつながります。こうした長期にわたる栽培活動は、特に情緒的な気付きを大切にする支援がのぞまれます。それは、子どもたちの活動の原動力になるからです。

「ぼくのアサガオね。話ができるよ！」と言う子が出てきたら、カードの書き方もお手紙風にするといいでしょう。カードには、植物との会話文がどんどん広がっていきます。私が、植物教材で期待する気付きは、このような植物と心が通い合う気付きです。そして、子どもの心が育つ情緒的な気付きです。